
ミスティローズ 甘い香りに魅せられて、君に死ぬほど恋焦がれて

滝沢美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミステイローズ 甘い香りに魅せられて、君に死ぬほど恋焦がれて

【Nコード】

N3801Z

【作者名】

滝沢美月

【あらすじ】

「明日、お前は運命の相手と出会うだろう 「突然、大巫女に
予言をくだされた巫女見習いの咲良は、キスされると内に眠る神力
が解放され、キスした相手に強大な力を発揮させる聖杯の乙女“ミ
ステイローズ”の宿命を背負っていることを知らず……。すべてを
憎むような反逆の瞳の盗賊に強引にキスされたり、見目麗しく気品
漂う王子に求婚されたり、生真面目な幼馴染に長年の想いを打ち明
けられたり、王子の側近に悪戯に迫られたり そんな美男子達に

翻弄されながら黄山へと旅に出る咲良の危険な逆ハーレム×ラブ
アンタジィ。

第1話 はじまりの予言

青々とした木々が生い茂り、爽やかな風が吹き抜け、色とりどりの花が咲く小道を進む咲良は空を見上げて深呼吸をする。

見えるのはどこまでも澄みわたる青空、葉は太陽の光をキラキラと反射し、まぶしいほどあざやかな色を揺らしている。雪解け水はサラサラと心地よい音を奏で、春を告げる花がもうすぐ満開になる。小道の先にある川に着くと、手に持った桶を傾けて水を汲む。それを両手に持つてふらふらと前後に揺らしながら、上機嫌で鼻歌を歌う。

「ふふふ〜ん」

こんなにいいお天気の日が良いことが起きそう

そんな予感を胸に、咲良は村へと続く小道を歩きだした。

世界を創造し、支配する黄帝がおわす神聖なる黄山。その南に位置する朱華国、首都立華と州都小華、その間にある小さな村・知華。そこには、国の宝である宝玉を守る大巫女・紅葉がひっそりと暮らしていた。

本来、大巫女は王宮の奥深くに住まい、祈祷や占いをして王に助言する役割を持つ。しかし紅葉は王宮を嫌い、首都から離れた知華に住居を構え、時々、王都からの使いに神託し、田舎暮らしを満喫

していた。

巫女であった母を幼い頃に亡くし、母の師であった紅葉に引き取られ育てられた咲良は、紅葉の姿を側で見続け、いつしか、巫女になりたいと願う様になった。

巫女になり、その力で人を幸せにしたいと思った。

その夢を叶えるために、今は巫女見習いとして紅葉の元で修行中の身だった。

修行といっても、一日のほとんどは家事をして終わってしまう。

水がたっぷりに入った桶を川から村の外れにある紅葉の住まいである館の台所まで運ぶ。桶を台所に置くとふうーっと大きな吐息をついて、桶を持ち上げ汲んできた水を甕に入れる。桶が二つとも空になると、咲良は腕まくりしていた袖を下ろした。

ふわりと袖の広がった淡い桜色の短い上着、その下に体の線にそった細身の艶紅のスカートをはき、腰にあざやかな若草と山吹の帯を巻いている。

頭の上で結わいた髪の毛は、窓から差し込む日差しを受けて青みを帯びて輝き、動くたびに背中ですらさらさらと流れては光の加減で微妙な色合いに輝く美しい黒髪。

瞳は大きく、形のよい唇と薄紅の頬が可愛らしい印象を与える。

耳には薔薇を模した耳飾りをつけている。

咲良は空の桶を部屋の隅に置くと、ぐーんと腕を天井に向けて伸ばして背伸びし、めくれた袖から雪のように白い肌が見えた。

午前中の家事はこれで終わり。咲良は昼食までの時間を森で潰すことにした。

館の台所を出、目の前に広がる森に一步足を踏み入れると、爽やかな風が咲良の頬をかすめ、さざめきが聞こえて、耳に手を当て、瞳を閉じて声に耳を傾ける。

“青い獣が……東から……近づいている……花が……”

ぱつと瞳を開けた途端、はつきりと耳に聞こえていた声がさざめきに代わり、ざわざわと耳をかすめていく。

咲良は不穏な空気をはらむ森の精霊の声に眉をしかめ、ぱたんつとその場に座り込み、両手を大きく広げて後ろに寝転がった。

「だめだわ……なんのことを言っているのかさっぱり……」

巫女は星の動きを読み、精霊の声を聞いて未来を占う。そのためには、星を読む知識はもちろん、精霊の声が聞けなくてはならない。巫女になるには生まれ持ったの素質か、訓練次第ではその力を得ることができる。

咲良は巫女の母を持つため、巫女としての素質はあると撫子に言われている。星を読むのも得意だ。いかんせん、精霊の声を上手く聞き取ることが出来ないでいた。

何度も自然の中で集中し精霊の声を聞く訓練をして、最近、やっと森の精霊の音が少しだけ聞き取れるようになった。それでも、何を言っているのかまでは分からなかった。

仰向けに寝転がった咲良はふうーっと大きなため息をつき、そのまま瞼を閉じる。

耳に心地よい風の音、揺れる木の葉は歌うようで、うとうとと眠くなってしまう。

もっと頑張って修行しなければと思う反面、そのうち巫女になればいとのんびり考えていた。

「……くら、咲良っ！」

自分の名を呼ぶ声に、咲良はぱちつと瞳を開ける。

目の前に広がるのは青い空で、それを遮るように黒い影が落ち、咲良はがばつと身を起こす。瞬間。

ゴン　つと鈍い音が響く。

「きやつ……」

「いってえ……」

黒い影の正体は幼馴染の柚希^{ゆき}で、寝入ってしまった咲良の顔を覗きこんだ拍子に咲良が身を起こし、柚希のおでこと咲良の頭が直撃したのだった。

お互いにぶつけた所に手を当て、苦痛の声をもらす。

涙目で頭をさする咲良は、横に片膝をついて立つ柚希を片目で見上げる。

「ごめん、柚希」

「大丈夫だけど……こんなところで昼寝か？」

額に当てていた手でそのまま少し癖のある栗毛の髪をかき上げた柚希は肩を落として、透き通るその瞳に気遣いの色を帯びる。

「なにか悩みごとか……？」

心配そうに眉をひそめて柚希に尋ねられ、咲良は瞠目する。それからふつとこぼれるような笑みを浮かべて、首を横にふった。

「なにも！　悩みごとなんてないよ。そんな心配そうな顔しないでよ」

ほんぽんと柚希の肩を叩いた咲良は、にこにここと笑みを浮かべた

まま立ち上がり、スカートについた草を払う。

「それならいいけど……」

そう言いながらも、納得してはいない様な柚希にちらりと視線を向ける。

二つ年上の柚希は紅葉の孫にあたり、柚希にとっては幼馴染といふよりも兄のような存在だった。

生真面目なこの幼馴染は、幼くに両親を失くした咲良をいつも気にかけて心配してくれる。

咲良が言えなくて抱え込んでしまう悩みにも、柚希だけは気づいてくれる。

優しく頼りになる柚希に無用な心配をかけまいと、咲良は笑顔で歩きだす。

言葉を切っていた柚希は咲良の後を追いかけてながら、戸惑いがちに言葉を続けた。

7

「おばあ様が、昼飯食べ終わったら予言の間に来るようにだって」「大ばば様が？ 予言の間に……？」

おばあ様とは大巫女・紅葉のことで、この村の住人は大抵、大ばば様と呼んでいる。

紅葉は一日の大半を予言の間で過ごし、星の動きを読み予言し、王都の死者への神託もここで行っている。

「ああ、咲良に事づけるように頼まれた」

「でも確か、今日は王都からの使者がお見えになって、予言の間には一日中詰めているはずじゃ……」

「使者は昼過ぎには帰るって。だから昼飯が終わったら って言ってるんじゃないか？」

言って柚希は黄褐色の瞳に影りを帯びる。

「なにかやったのか？」

問いただすように静かに尋ねる柚希に、咲良はあわてて首を横にふる。

「なにも……なにもしてないわっ」

本当に呼び出される理由など何も思いつかなくて、咲良はぎゅつと眉間に皺を寄せた。

青空が……今日はいいいことが起りそうって思ったのに……

まだまだ巫女として修行が足りないってことかしら

咲良は内心で大きなため息をついた。

昼食を済ませた咲良は食堂を出て長い通路を進んだ先にある扉を開ける。そこは本館から孤立した円柱型の塔の中で、内壁をめぐるようにして螺旋階段が続き、長い階段を登りきると踊り場に出る。

咲良は踊り場にある一つの扉に静かに近づき、扉の中の様子をうかがい、ごくんと喉を鳴らす。

この先にあるのが予言の間

予言の間には何度も足を踏み入れた事はあるが、こんな風に呼び出されて行くのは初めてのことで、不安と緊張で鼓動がどんどん速くなっていった。

意を決して扉を叩き、部屋の中に足を踏み入れる。

室内は石造り、天井は半球型、部屋の中央には星を読む大きな円盤が置かれ、その下には古文字が書かれたふかふかの絨毯、部屋の四隅には小さな卓が置かれている。壁には細長い窓がいくつもあり、露台が部屋の周りに続いている。

円盤の側にいた紅葉は部屋に入ってきた咲良に気がつくのと、ふつと手を止めて、側に座るように促した。

「咲良、来たか」

「はい、大ばば様。ご用事と伺いました」

「ここに座りなさい」

咲良は言われた通り紅葉に近づくと、円盤のすぐ側に腰を下ろし、上目使いに紅葉を見上げた。

紅葉は白髪の混じる栗毛を背中に流し、先の方を濃紺のリボンで結わいている。身を包むのは白と深紅の巫女装束、その上からあざやかな藤色の袍を羽織っている。

年老いてもなお精彩を放つ相貌は、若い頃は天女のようにだと例えられるほどだった。

わずかに長い睫毛が揺らした紅葉は、円盤の上に置かれた小さな石を拾い上げ、東から南へと位置をずらす。

「今日は特別に予言を授けよう」

「予言……ですか？」

戸惑いを露わに聞き返す咲良に、涼しげな視線を向けた紅葉は間をおかずに先の言葉を続ける。

「明日、お前は運命の相手と出会うだろう」

運命の相手

思いもよらない言葉に、咲良は驚きで大きく目を見開き、身動きもとれなかった。

第2話 運命の日

『良い未来も悪い未来も己の力次第で変えられる。決まっている運命などないのだ。』

そういうのが紅葉の口癖だった。

だから、まさか運命の相手に会うと言われるとは思わなくて、咲良は動揺を通り越して呆けてしまう。口をぽかんとさせていると。

「話はこれで終わりだ」

紅葉は素っ気なく言い、予言の間から咲良を追いだしてしまった。鼻先でパタンと閉まる扉を呆然と見つめた咲良は、どこをどう歩いて自室まで辿り着いたのか記憶がなかった。気が付いたらベッドの中で仰向けになっていた。

「運命の相手……」

ぼつりとこぼした咲良は、形のない物を掴むような漠然とした気持ち持ちが拭えなかった。

いつか素敵な人と出会って恋をして、母や父のように結婚して子を産んで

そんな未来を思い描いたこともあるが、いきなりその相手に出会うと言われて、正直戸惑っていた。

どうして大ばば様はあんなことを仰られたのかしら

不安と少しの期待を胸に、咲良は睡魔の中に落ちていった。

翌日、騒がしい物音に、咲良はがばつと身を跳ね起こした。

被っていた毛布を足元まで下げベッドから足をおろすと、そばにあつた上着を白い夜着の上から羽織り、部屋の外に出た。

紅葉の館には、紅葉とその孫息子の柚希、使用人が数人と咲良が暮らしている。

個室の扉が並ぶ通路を進み一階に降り、食堂に足を向けたが、そこはがらんと静まり返り、誰の姿もなかった。朝は皆がそろつ食堂に、誰もいないことを不審に思いながら、喧騒が館の外から聞こえている事に気づき、外に出て、驚愕の光景に息をのむ。

村の西側から火の手が上がり、馬のいななきや怒声に混じつて悲鳴が聞こえる。村の外れにある紅葉の館の近くには人の姿は見えないが、異様な事態に咲良は眉間に深い皺を刻む。

一体、何が起こっているの？

尋常ではない様子に、咲良は村の西側へと走り出した。

逃げまどう村人とそれを追うように青錆色の外套を羽織つた騎兵と歩兵がうろついていた。隣国・蒼馬国そうばこくの王軍だった。

騎兵の中で、ひととき豪華な武器を身につけた男　おそらく將軍が見下すような鋭い視線を投げつけながら叫んだ。

「村長はどこだ　？　大巫女を出せ　。　ここにいるのは分かっている　」

村人は怯えながらも東側へとわずかに視線を走らせたのを、咲良は見逃さなかった。

東側にあるのは村長。村長はまだ館に　？

きつと大ばば様もそこにいるに違いない
確信に近いものを感じ、咲良は兵に気づかれぬようにゆっくり
とその場を抜け出し、村長の館へと向かった。

館の前には、押しかけた村人とそれを宥める紅葉の姿があった。

「みんなの者、落ち着くのだ。すでに王都へ知らせを出した。間もなく王軍が救援に駆けつけるだろう」

涼やかな目元に僅かの憂いを宿し、凜とした声音で言う紅葉を、
すぎるように村人が囲む。

「さあ、私の館の中へっ」

促すように言った村長の声に、わらわらと村人が玄間をくぐる。
人混みをかきわけ、紅葉の元に駆け寄ってきた咲良に、紅葉は一
瞬、目を見張り、それから小さな吐息のような声をもらす。

「来たか……」

その言葉は誰に聞きとられることもなく、風にさらわれる。

「大ばば様……っ！　これは一体　」

紅葉は面倒そうに眉根を寄せると、形良い唇をきゅっと噛みしめ
る。

「朱華国の国宝を私が持つと聞きつけて、隣国の兵が襲ってきたの
だ」

「国宝……ですか？」

黄山を囲むように世界に存在する四つの大国には、黄帝から下賜された宝が存在する。朱華国ではその国宝を歴代の大巫女が管理することになっているが、紅葉の側に仕えながら今まで一度もその国宝を見たことがなかった咲良は首をかしげる。

秘宝と言われるだけあって滅多に目にすることができないのだから、忘れ去られたような存在の国宝。それがなぜ狙われるのか、しかも隣国が欲しが理由を理解できなかった。

話しこんでいる間に、村人と村長は館の中に避難し、あたりには咲良と紅葉の二人だけになっていた。

その時、荒々しい蹄の音が響き、砂埃が上がり、先程声を張り上げていた将軍が先頭を切り、その後ろに青錆の外套をまとった配下の歩兵三人が続いてきた。

威厳に満ちた瞳で男を睨んだ紅葉に、将軍は冷たい視線を向ける。

「お前が朱華国の大巫女か」

「隣国の一兵士に名乗る義務はない」

冷たく言い放つ紅葉に対して、馬上の将軍は威ついで体を震わせ、顔を怒気に赤らめる。

「それよりも、直ちにこの村を立ち去るのだ。隣国がこの国に干渉することは許さぬ」

鋭く言い放つ紅葉に、つき従っていた兵士が戸惑った声を上げる。

「右将軍、どうしますか？」

威厳に満ちた瞳、巫女と分かる衣装を身につけた紅葉は、誰が見ても大巫女であることが分かる。だが、侵略を許さない激しい瞳に

睨まれて、兵士は剣をつきつけことを躊躇う。

「よい、捕らえよ」

「できるものなら、捕えてみよ」

紅葉は凜とした瞳を不敵に輝かせ、言うと同時に兵士達に向かって両手を突き出す。

瞬間、ほとばしる炎が鳥の形をとり、兵士めがけて襲いかかった。兵士達は炎にまかれ逃げまどいが、そんな中、炎の鳥を交わした將軍は白刃をきらめかせ、紅葉に真横から切りかかってきた。

「このっ」

側にいた咲良は、とっさに紅葉をかばうように両手を広げ、將軍と紅葉の間に滑り込んだ

第3話 盗賊団の頭

咲良は紅葉を守るため、振り下ろされた白刃と紅葉の間にとつさに滑り込む。

「大ばば様あ　っ」

迫りくる白刃、続いてくる衝撃に備えてぎゅっと目を瞑った咲良は、いくら待っても痛みを感じなかった。

將軍の刀身が振り下ろされる直前、長い髪をなびかせた男が咲良の前に立ち、將軍の剣よりも早く、光のような剣さばきで將軍の肩を切りつけた。

「うわぁ……………」

悲鳴が聞こえ、咲良は強く瞑っていた目を恐る恐る開ける。

瞬間、目の前に広がるのは青みを帯びた漆黒の髪。

紅葉に切りかかるうとしていた將軍は血のにじむ肩口を押さえ、苦々しそつに唇をかみしめる。

「とっ……………盗賊だぁ……………」

遠くの方から聞こえる配下の声に振り返った將軍は、じりじりと後ずさる。一緒に村長の館まで来た配下三人のうち二人はその場にうずくまり、一人は早くも逃げ出していた。その間にも、長髪の男の元には仲間の盗賊と思われる男が一人駆けつけ、あちこちで配下の悲鳴が聞こえた。

分が悪いと判断した隣国の將軍は、背を向けて走り出すと同時に、素早く馬の手綱をとり馬上に駆けあがると声を張り上げた。

「退却 っ」

逃げる隣国の兵を見送りながら、咲良は自分を助けてくれた男の輝く髪に見とれていた。

咲良自身、濡羽色の綺麗な髪だと言われることはあるが、これほど綺麗な青みを帯びて艶やかに輝く髪を見たことがなかった。

「頭 ……」

刀をしまった長髪の男の側に駆けつけた茶毛の男がなにかを耳打ちする。男がふつと振り返った瞬間、咲良は大きく鼓動が跳ねるのを感じた。

冷たく見えるほど整った顔立ち、切れ長の瞳は髪と同じく青みを帯びた濡羽色、光の加減で濃さを変え、今は青みをわずかに帯びている。ドキつとするほど澄んだその眼差しの底には、野獣のようなきらめきがあり、気品に満ちた色香を漂わせている。

息が止まるほど端正な美貌に、呆然と見つめてしまった咲良と視線があつた男は、瞳の青みを強くし、わずかに瞠目する。

見つめ合うように動きを止めた二人を、紅葉は片眉をわずかに上げて見つめた。

「お前が大巫女か」

あからさまに疑わしい眼差しを咲良に向けた男に、紅葉が狙われている事も忘れて思わず答えてしまつた。

「ちつ、違います、私は巫女見習いで、大巫女はこちらの方ですっ
咲良は顔を真っ赤にして紅葉の横にずれ、紅葉は嘆くように言っ
て額に手を当てた。

「馬鹿者め」

その言葉に含まれた意味を、咲良が正確に理解するのはずっと後
のこと。

「ふーん、このばあさんがね……」

目をすがめ、濡羽色の瞳を青から黒に揺らした男は、目にも止ま
らぬ速さで鞘から剣を抜き紅葉の喉元に突きつけた。

「お前が国宝を持っていることは分かっている。命惜しくば、出せ」

男はその瞳に世界のすべてを憎むような反逆の光を宿し、威圧的
に言い放つ。

紅葉はびくりと眉を動かし、それから肩をすくめてふうーっと吐
息をもらした。

「こんな老いぼれの命など惜しくはないが、国宝はここにはない」
「ない、だと？ そんなはずはない、朱華の国宝は代々大巫女
が守っているはずだ」

「本当はないのだ……。十六年前、国宝を失くした責任をとるため
に私は王宮を出た。だが当時、大巫女を継ぐに足る力を持つ巫女が
いなかったため、そのまま大巫女を続けている」

両手を腰の脇で広げ、苦笑する紅葉の言葉はとても嘘を言ってい

るようには見えなかった。

そんないきさつで、紅葉が王都から離れた小さな村に身をひそめていたと知った咲良は驚きを隠せなかったが、国宝を一度も見たとがなかったのは失われていたからだと納得する。

「本当か？」

「ああ、本当だとも。だが、証明することは出来ない。さあどうする？ 老いぼれの命をとるか？」

鋭い視線で見すえていた男は、すっと刀を下ろすと鞘にしまう。

「無駄な殺生は趣味じゃない」

不敵な意志を感じさせる瞳に影を落とし、男は静かに言って歩き出した。その後に赤毛の男が続く。

あまりの美貌に見とれ呆然と紅葉と男のやり取りを聞いていた咲良は、はっと肩を震わせて男を追いかけた。

「待って」

男は止まらずに肩越しに振り返り、瞳の青みを深くした。

「なんだ？」

「あの、ありがとうございます」

何を言おうかと一度口をつぐんで俯き、顔を上げた咲良はお礼を言った。男が盗賊で、隣国の兵同様国宝を狙っていたことも、紅葉に刃を向けた事も許せることではない。だけど、そんなことを考えるよりも先に、言葉が口から出ていた。

「助けて下さって、ありがとうございます」

男はぴたっと歩くのをやめ、体ごと振り返って咲良をまっすぐに見据えた。その瞳に不敵な光を浮かび、ふっと皮肉気な笑みを浮かべる。

「助けた訳じゃない、大巫女に死なれては国宝のありかを聞き出せないからな」

冷たく言い放った男に向かって、咲良は深々と頭を下げた。

「それでも……あなたがいなければ、私も大ばば様もすでにこの世にいなかったでしょう。だからそのお礼です」

純真で汚れを知らず、どこまでも澄みきった瞳を見て、男はぎゅっと奥歯を噛みしめる。濡羽色の瞳に深い青を映し、一瞬、苛立たしげな光をきらめかせる。

それから、咲良の二の腕を強く引き寄せると同時に頬を斜めにかたむけ、深く熱いキスを落とした。

自分の唇に熱い感触を感じた咲良は大きく肩を揺らす。ビリッと背中にしびれが走り、炎を注ぎこまれたように胸が焼けるような気がした。体の中でなにかが大きく膨れあがるような衝撃に襲われる。見開いた視線の先で魅惑的な青みを帯びた瞳でくいているように見つめられて、誘うような甘い光がきらめいた。

咲良は甘い気持ち胸に渦巻き、とろけるような包容感に満たされて、くらくらと目眩がしそうだった。

永遠にも感じた時間がふっと止み、男が咲良から体を離れた。

すっと離れていく色っぽい唇を、精悍な体を恋しく感じ瞳を潤ませた咲良に、男はすべてを憎むような反逆の瞳をきらめかせ、冷やかに言い放つ。

「礼なら、これくらいしてくれるものだろう」

ゆるぎない瞳の中に、うっとりするほどつややかな光が浮かび上がり、咲良はその眼差しに魅いつてしまい、息をのむ。

その時。

村の方から猛々しい馬のいななきが聞こえ、男はぱつと振り返る。その後ろで呟いた紅葉の声に舌打ちをし、さつと表情を引き締める。

「ようやっと、救援の王軍がついたか……」

安堵の吐息をもらした紅葉を振り返った一瞬の隙に、盗賊は風のように姿を消していた。

目当ての国宝はなく、王軍が駆けつけてきたときいて、青羽は速やかに退散するように仲間に伝えた。

知華村を襲撃した盗賊達はちりじりに村を抜け出し、西の丘で落ち合つことになっていた。

青葉は漆黒の長髪を揺らしながら村の側に繋いでいた馬に駆け寄り、ぎゅっと手綱を握りしめた。

一刻も早く村から離れなければならぬ状況で動きを止めた青羽を訝しむように、茶毛の男が馬にまたがりながら声をかける。

「青羽、どうした？」

呆然と立ち尽くしていた青葉はびくつと肩を揺らし、ゆっくりと

馬を引きながら数歩歩き馬にまたがる。

「いや……なんでもない……」

言いながら青葉は目元をわずかに赤くし、唇にそつと触れる。

そこにはまだやわらかな唇の感触が残り、火傷しそうな熱を帯びていた。

キスをしたのはからかうつもりだった

盗賊の自分に向けられた純真な眼差しが眩しすぎて、羨ましくて、憎らしくて

キスでもすれば動揺するかと思った。それなのに、動揺していたのは自分の方だった。

軽い口づけのつもりが、甘い香りに引き寄せられて、もっともつと欲していた

冷静を装いキスは礼の代わりだと言ったが、胸の中に荒波のようにうずまく情熱に支配され、たぎる想いをもてあまし、やるせなかった。

キスなんて初めてじゃないし、女を抱いたことも何度もある。それなのに、こんなに苦しく切ない気持ちになるのは初めてで、青葉はぎゅつと唇をかみしめる。

この気持ちが悪情だとしても、そんなことに気を取られている場合ではない。なんとしても、朱華国の国宝を手にいれなければならぬ理由があった

馬首を西の丘に向け、手綱をさばいた青葉は肩越しに知華村を振り返った。

その長い睫毛が落とす影の中で、濡羽色の瞳があざやかな青みを帯びてきらめいた。

第4話 美麗の王子

冷たく見えるほど整った顔立ち、切れ長の青みを帯びた瞳は艶っぽく、ドキっとするほど澄んだその眼差し。底には世界のすべてを憎むような反逆の光を宿していた。

息が止まるほどの美貌の男が立ち去った方を呆けたように見つめていた咲良は、次第に思考が回り始めて、さあーっと顔を青ざめさせ、それから真っ赤にその頬を染めた。

盗賊を名乗る長髪の男は尊敬する紅葉に刃を向けた。そのことは許せないが、それでも命の恩人には変わりはない。だから礼を言ったのに、いきなりキスするなんて

合わさった唇から熱がほとばしり、甘い感覚に溺れてうっとり快感に身をゆだねてしまったが、今思い出すと……

私のファーストキスう……………

知らない男、しかも奪われるようにされたキスに青ざめ、それからふつふつと怒りがこみ上げる。

乙女の唇を奪うなんて、許せないわっ！！

ぶつぶつと憤慨しながらも、咲良は熱い頬を隠すように手の甲を当て、視線を横に落とした。

怒っているのに胸の高鳴りはおさまらなくて、どうしようもなく切ない気持ちに心が締め付けられる。

あんな男

そう思うのに、あの射るような濡羽色の瞳が忘れられなかった

村の西側。紅葉から村人を東側へと避難させるように言われていた柚希は、村人を誘導し、時には襲いかかる兵士を倒しながら村中を駆けまわっていた。

兵士を数人昏倒させ、また兵士と刀を切り結んでいる時、近くから悲鳴とざわめきが聞こえた。

「とっ……盗賊だあ……」

ちらつと横に視線を走らせると、数十人の盗賊が姿を現し、素早い動きで兵士を叩きつぶしながら村に散らばっていく。

その中で、ひと際目を惹く美しい黒髪をなびかせた長身の男が、村の東側へと駆けていくのを見て、ドキッとする。

向こうには、村人とおばあ様が

だが、気をそらした瞬間を見逃さなかった兵士が交えていた剣を強く押してきて、柚希は目の前の兵士へと意識を集中せざるを得なくなかった。

なんとか兵士の鳩尾に刀の打ちこんだ柚希は、敵兵がうるたえながら村の北側へと退却していくのに気づき、首を傾げる。

それと同時に、王都の方角から猛々しい馬のいななきが聞こえ、そちらにぱつと視線を向けた。

夕陽のようなあざやかな紅の外套と武具を身につけた王軍　そのなかでも精鋭ぞろいの近衛騎兵隊が駆けつけてくるのが見えて、ほっと胸をなでおろす。

「援軍だ……」

安堵に表情を和らげ呟いた柚希の声に、逃げ遅れて辺りにいた村人が一斉に王軍の方へと視線を向ける。

列を乱すことなく光のような速さで馬を駆けてきた王軍は村に到

着すると、刀を鞘に納めるのを忘れて見とれたように立ちつくす袖希の前でびたりと動きを止めた。

「隣国の王軍が攻めてきたと聞いたが」

先頭の騎乗の兵士は尋ねながら兜を脱ぎ去る。そこから、夜空を切り取ったようなまばゆく輝く漆黒の髪がさらさらとこぼれ落ちる。切れ長の二重瞼、その下の瞳は気高さに彩られ、高く通った鼻筋形の良い唇は色っぽく、まさに王子理想を絵に描いたような紳士的な美貌の青年に、袖希は大きく目を見開く。

紅葉の使いで何度も王宮へ行ったことがある袖希は、その顔を知っていた。

「朱璃……王子……っ」

掠れて出た声に、王子と呼ばれた美麗の青年は形の良い眉を持ち上げ、華やかな笑みを浮かべる。

現れたのは王子のような青年ではなく、まぎれもない本物の王子だった

袖希はその場に素早く片膝をつき、胸の前で腕を組んで頭を下げる。

「これは……王子自ら駆けつけて下さり、ありがたき幸せ」

恭しく言う袖希に頷き返した朱璃は、素早く辺りに視線を向け、わずかに片眉を上げる。

「敵軍はどこに？」

「隣国の軍に続き、盗賊が現れ この辺りの兵はついでしたが、北の方へと退却しました。大半の村民と村長と大巫女は東の方に避

難しています。敵国も盗賊も大巫女を狙っている様子なので、たぶん

顔を上げた柚希は、凜とした響きを帯びて状況を素早く報告する。辺りには、すでに青錆色の敵軍の姿も盗賊の姿も見当たらない。柚希の言葉を受けて、朱璃は気品にあふれた瞳に鋭い光を走らせ、振り返る。

「半数は北へ、敵軍の追跡を命じる。隊長、指揮を頼む。副隊長と残り半数は私と共に東へ、大巫女と民の救助に向かう」

朱璃のすぐ後ろにいた三十代ほどの無骨な男が頷くと、素早く馬首を北へとひるがえし、その後を近衛兵がぞくぞくと続く。そして半数の兵は村の東側、村長の館へと急いだ。

盗賊が姿を消したのとほぼ入れ違いに、数騎の馬が蹄の音を高く響かせて駆けつけた。

先頭を切り駆けてきたのは、兜からこぼれる燃え立つような赤毛の副隊長しんまる蘭丸。

村長の館の前には紅葉と咲良の二人だけの姿があり、ゆっくりと咲良の側で馬を止めた蘭丸は尋ねる。

「ご無事か？ 敵軍は？ 盗賊は？」

顔を赤らめて西の方を睨んでいた咲良は、突然声をかけられて振り仰ぎ、ぱくぱくと口を動かす。何を聞かれたのかぜんぜん聞いて

いなくて、答えることが出来なかった。

見兼ねた紅葉は大きな吐息をつきながら漆黒の瞳を細めて、咲良の代わりに口を開く。

「隣国の兵士は数分前に退却した。盗賊も、近衛隊が駆けつけたのに気づいてたつた今、逃げたところだ」

救援の軍を要請しながら、軍が間に合わないことを知っていたように落ち着いた声で言った紅葉は、副隊長の後ろ、縫いとめられたように動きを止める朱璃に視線を向けていた。

一步遅れて村長の館の前についた朱璃は、白い夜着に身を包んだ華奢な肢体、背中に流したままの艶やかな濡羽色の髪、華のような顔立ちの少女に、目を奪われる。

気品あふれる漆黒の瞳に激情があざやかに色どり、強い感情に動かされて朱璃は素早く馬から降りると、立ち尽くす咲良の両手を遅しい手で掴み上げた。

「なんと美しい……あなたのように可憐な女性と出会つのは初めてです。これは運命か」

突然、美貌の青年に手を掴まれた咲良は大きく目を見開き、焦がれるような熱を宿した強い眼差しで見つめられて、ドキドキしてしまつ。

「あなたのすべてが知りたい。このまま時が止まってしまえばいいのに……」

救援に来た事も、側に大巫女や側近がいる事も忘れて、朱璃の目には咲良しか映っていなかった。

うつとりと目を和ませた朱璃は片手を咲良の手に当てたまま、

もう片方の手を咲良の腰にまわす。そして頬を傾け、降り注ぐようにゆっくりと咲良の顔に近づけた。

間近に迫った美麗の顔に、咲良は内心で悲鳴を上げた。

いやぁ ……っ!!

第4話 美麗の王子（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです！

第5話 獅子は谷底に

唇が触れる

そう思った瞬間、ぶわりと熱風が吹き荒れ、咲良の眼前で小さな火竜が猛々しい咆哮をあげ、朱璃を威嚇した。

「王子よ、戯れはそれくらいにせよ」

美しい黒髪をなびかせて、片手を前に差し出した巫女装束の紅葉が凜とした声音で言い放つ。

腕の中の少女が顔を真っ赤に染め、目元を潤ませていることに気づいた朱璃は、すっと身を引き、優雅に腰を折り一礼する。

「申し訳ありません、美しい人　あなたの甘い香りに魅せられて、自分を制御することを忘れていました……」

悩ましげな顔で甘い吐息をもらした朱璃は咲良の手をすくい上げると、そこに触れるか触れないかのキスを落とし、その瞳にうっとりするほど甘やかなきらめきを宿す。

「私は朱華国第一王子、朱璃と申します。よろしければあなたのお名前をお聞かせ下さい」

真摯な微笑みを向けられて胸がきゅつと締め付けられると同時に、咲良は口に手を当てて大声をあげていた。

「王子様……ええっ　!？」

耳に響く絶叫に紅葉は顔を顰め、蘭丸はくすりと忍び笑いする。動転して振り返った咲良は紅葉が頷くのを見て、そういえばさっき大ばば様も王子と言っていたような……と思い出して、自分でも分かるくらいかぁーっと顔が赤くなってしまう。

いきなり目の前に美しい王子が現れて、咲良は何度も目を瞬かせ

る。自分を見つめる少女に微笑み返した朱璃は、紅葉の前に進み、胸の前で腕を組み、頭をわずかに下げる。

「大巫女様、ご無事な様子で安心いたしました」

「王都よりはるばるご苦労だった。攻めてきた隣国の兵は逃げてしまったが、王子自ら近衛隊をひきつれて救援にいられたこと、民にとって心強い励みになるだろう」

「恐れ入ります。もう少し早く駆けつけることができれば……」

悔しそうに美しい顔を歪めた朱璃に、紅葉は凜とした輝きの瞳を向ける。

「よい、気にするな」

静かな紅葉の呟きの、本当の意味を理解した者はここにはいなかった。

朱璃は残兵の搜索と村の被害調査、怪我人の手当て等近衛隊に指示を出し、村長に挨拶を済ませ、部下の報告を待ったために紅葉の館へと向かった。

玄関脇の応接室へと案内された朱璃は二人掛けのソファーに優雅に腰掛け、使用人が運んできた紅茶に口をつけてから、もどかしげ

に部屋の隅に控えていた咲良に視線を投げかけながら、テーブルを挟んだ向かい側のソファーに座る紅葉に声をかけた。

「大巫女様、そちらの方を私に紹介して下さいますか？」

気品あふれる強い眼差しを咲良に向けたまま言われ、紅葉は涼やかな瞳をすっと細め、苦笑する。

「この者は私の元で巫女の修行をしている娘だ。咲良、挨拶なさい」
いきなり自分の方に話をふられた咲良は目を大きく見開き、それからその場で両膝をつき汲んだ腕の間に顔を沈め、最高礼の形をとる。

「咲良と申します」

「咲良……美しいそなたに似合いの名前ですね。巫女見習いということはいずれは巫女になるのでしょうか。それならば」

そこで言葉を切った朱璃は、ふっとその瞳にうつとりするほどあざやかなきらめきを彩る。

「王子の花嫁として身分に申し分はありません。咲良、私の花嫁になりませんか？」

夜空を切り取ったような漆黒の瞳に妖艶な輝きを宿し、甘い微笑みを浮かべた朱璃に求婚され

咲良は思わず顔を上げて、朱璃を振り仰いだ。

「どうかな？」

くすりと優しげな笑みを浮かべた朱璃は、理想の王子そのものの美貌を輝かせ、熱い眼差しで見つめてくる。

「そなたには将来を約束した者がいるのですか？」

その言葉に、側に控えていた柚希がぴくつと眉を動かす。

「いませんが……」

「では、私の元に来てくださいますね？」

咲良の言葉にぱつと顔を輝かせた朱璃に対し、咲良ではなく紅葉が困ったような吐息をもらす。

「それはならぬ」

紅葉の制止の言葉に、朱璃はわずかに眉をひそめる。

「なぜですか？ 大巫女様」

「いずれは私の後継者に」と考えておる。大巫女になる条件は知っておろう？」

凜とした眼差しにまっすぐ見据えられて、朱璃は困ったように肩をすくめる。

「神に純潔を捧げる清き乙女……ですか」

「そう、乙女でなければならぬ。したがって、結婚は許されない」

思いもよらない紅葉の言葉に咲良は、もうこれ以上無理　と言
うほど大きく目を見開き、口をかぼつと開ける。

私が大ばば様の後継者　？

ただでさえいきなり美麗の王子に求婚されて思考が上手く回らな
いっていうのにその上、後継者だ、結婚は出来ない、乙女でなけれ
ばいけない　などと次々に衝撃的なことを言われて、咲良の思考
回路は完全に停止してしまふ。

なにになになになに　どういうことお　……！？

膝をついたままの恰好で固まっている咲良にちらりと視線を流し
た紅葉は、ふうーっと大きな吐息をもらし、言葉を続ける。

「だが　咲良はまだ巫女見習い。巫女になり、ある程度の実践を
積みなければ大巫女には慣れぬ。そのために、まずは咲良を黄山に
行かせようと思う」

「黄山　ですか」

紅葉の言葉にいち早く反応したのは、朱璃だった。その言葉だけ
で、すべてを理解したように強く頷き返す。

「黄、山……？」

よつやっと口を開くことの出来た咲良の声と柚希の掠れた声が重
なる。

「そうだ。咲良よ、お前は黄山に赴き、黄帝より巫女の宣旨を受けてくるのだ」

黄山とは 世界を創造し支配する黄帝がおわす神山。小華国の北、世界の中央に天高くそびえ立つ。

巫女は神力を使うことが出来るため、王族に次ぐ地位を持つ。そして巫女になるためには、黄山に在るといわれる黄帝より巫女としての資質を認められ、宣旨を受けなければならぬ。そうやって初めて、一人前の巫女となることができるのだ。

今年で十六歳になった自分にもようやくその機会が来たのかと、咲良は期待に胸をふくらます。

「はい っ」

力強く頷いた咲良を見て、一瞬、紅葉の凜とした眼差しに憂いが帯びたことに気づく者はいなかった。

朱璃に向き直った紅葉は、冷静な口調で告げる。

「そういうわけだ。王子の花嫁にさせることは出来ない」

今はまだ

心の中で紅葉は呟き、真摯な瞳を朱璃に向ける。

「わかりました」

一瞬俯き、そして顔を上げた朱璃は、その瞳に強い意志を宿して気品あふれる微笑みを浮かべる。

「花嫁として迎えるのは諦めましょう。その代わり、黄山行きの旅

に私も同行させていただきたい」

「おっ、俺も一緒に行くっ」

朱璃の言葉にはじかれたように叫んだ柚希に、みんなの視線が集まる。それまで隅に控えていた柚希の存在をすっかり忘れていた朱璃はその目を細める。

柚希はその頬をわずかに染め、自分を見つめる咲良からふっと視線をずらした。

「咲良のお守役は俺しかできないだろう……」

そんな理由しか思いつかず、柚希はぎゅっと唇をかみしめる。

一緒に行くことは許されないか……

そう思ったが。

「いいだろう、咲良一人ではなにかと心配の種は尽きぬ。柚希と、それから王子の同行を認めよう。咲良も異存はないな？」

自分の意見を求められるとは思っていなかった咲良は、慌てて首を縦に振った。

「はい……」

正直、知華村から出たことのない咲良は、一人旅に不安を抱いていた。だから、幼馴染の柚希が同行を願い出てくれたことに安堵していた。なぜか、王子も一緒に行くことになっていたが

かくして、巫女見習いの咲良、幼馴染の柚希、朱華国第一王子朱璃の黄山行きの旅が決定した。

第6話 王都へ

旅支度を整えた咲良は予言の間に足を踏み入れた。

運命を予言された時と同じく、予言の間には紅葉と咲良の二人だけ。静寂が室内を包み、揺れる灯火のはぜる音がやけに大きく聞こえる。

違うと言えば、あの時は中天よりやや西に傾いていた太陽が今は姿を隠し、代わりに夜の眷族の月が神々しい光を放ち、空を支配していた。

「準備が整いましたので、夜明けとともに黄山に向けて出発します」
「そうか」

部屋の中央に置かれた円盤に視線を落としていた紅葉は、扉の側に立つ咲良に視線を向け、長い睫毛を揺らす。その瞳は真剣な輝きとわずかの憂いを帯びていた。

「こちらに座りなさい。出発する前に、お前に伝えて置かなければならないことがある」

「それでは行ってまいります」
「行ってきます」

知華村の西側、東の端がうつすらと白み始めた頃。
黒鹿毛の馬の手綱を持った袖希とその横に並ぶ咲良を見送るのは、
紅葉ただ一人。

「ああ、気をつけて行ってきなさい」

馬の背に咲良を乗せた袖希はひらりとその後ろに跨り、咲良の体を支えるように腕を回し手綱を強く握りしめる。馬はゆっくりと足を動かかし出し、西　王都を目指して駆けだした。

袖希の腕に包まれるように馬の背に乗った咲良は、どんどん駆け抜けていく景色に見とれていた。

一方、袖希は……

胸に感じる華奢な背中と体温を必要以上に意識してしまい、かあーっと顔が赤くなるのに気づいて、ぎゅっと奥歯を噛みしめる。

馬で駆けた朱璃達に少し遅れて村長の館の前についた袖希は、遅しい片手の中に咲良を抱きしめ、今にも唇に触れようとしている光景を目撃して、殴りつけられたような強い衝撃を受けた。

幼い頃からずっと一緒だった

袖希にとって咲良は血は繋がらなくとも可愛い妹で、ずっと見守ってきた大切な女の子

生まれてすぐに両親を亡くし、知華村から出た事もない世間知らずの咲良を守るのは自分の役目だと思っていた。それなのに

いきなり目の前で咲良に迫る朱璃の姿を見て、燃え立つ激情が溢れだし、胸が焦げるように痛んだ。

その時初めて袖希は思い知る　妹としてではなく、一人の女の子として愛おしく思っていたことに。

溢れだした感情は渦を巻き、自分でも押さえられないほどの強い波を作って心を揺さぶった。袖希は、自分の中にそんな強い感情があることを知らなくて、激しい焦燥感に戸惑いを隠せなかった。

紅葉の館の応接間へ移動する時も、袖希は紅葉が何も言わないこ

とをいいことにちゃっかり同席した。朱璃がずっと咲良に熱い眼差しを向けていることに気づいて、じっとしていられなかったのだ。

だから、朱璃のいきなりの求婚には驚きを隠せなかったし、咲良に誰か将来を約束した人がいるのかと質問した時も、息を飲んで咲良の返答を待った。咲良の黄山行きが告げられ朱璃が同行を願った時はいてもたってもいられずに、気が付いたら自分も同行を願っていた。

紅葉の使いで何度も王宮へ行き朱璃とも対面したことがある柚希は、彼の性格も知っている。穏やかな性格で、誰に対しても気さくに話しかけ、英知にあふれる朱璃は、気品にあふれたまさに理想の王子像そのものだった。

そんな朱璃と数日共に過ごせば、咲良が朱璃に惹かれない理由はなかった。旅が終わる頃には、王子の花嫁になりたいと思ってしまうかもしれない。そう考えただけで胸が痛み、咲良と朱璃の二人旅を許し、じっと村で待つことなど出来そうになかった。やきもきとした気持ちで、おかしくなってしまうそうだった。

思わず口を開いた柚希は、純粹な瞳でじいーっと咲良に見つめられドキッと大きく胸を跳ねさせる。

女の子として意識してしまった今、咲良のことをまっすぐ見ることもままならない。

「咲良のお守役は俺しかできないだろう……」

そんな風にしか言うことが出来ず、柚希はぎゅっと唇をかみしめる。

柚希の心中の不安など知らない紅葉と咲良は、馬に乗れない咲良のために旅の供を申し出てくれたのだと思っっているようだった。

柚希にとって、初めて見る景色に見とれて柚希の方を振り返ろうとしない咲良が、今は救いだった。

馬に乗ったことがなかった咲良は、柚希の同行を心から感謝した。朱華国の首都から黄山までは馬でなら七日程で行ける距離も、徒歩だで行くだけで三カ月以上かかってしまう。馬に乗ることも出来ず、馬車などを使う費用もない咲良にとって、柚希の馬に乗せてもらうことは旅を格段に楽なものにし、時間を短縮することもできる。黄山行きを聞いて瞬時にそのことに思い至り同行を願い出てくれた柚希に、あらためて頼りになる幼馴染だと思い、咲良はふふっと小さな笑みをもらった。

咲良の旅への同行を願い出た朱璃は一度王都へと戻り、国王からの許しを得、王都の南門で咲良達と落ち合う約束をしていた。

朱璃としては紅葉の手前あ場では咲良のことを諦めるしかなかったが、胸に芽生えた強い気持ちに逆らうつもりはなかった。

愛おしい 胸に芽生えた感情をそう呼ぶことを朱璃は知っている。王子として王宮で華やかな女性に囲まれ、恋をしたこともそれ以上の経験もある。自分よりも小さな体を腕の中に抱きしめ、愛おしいと抱きしめた。 だけど

白い夜着に身を包んだ華奢な肢体、背中に流したままの艶やかな濡羽色の髪、さくら色の形の良い唇をした咲良を見た瞬間、香り立つ華のような美しさに目を奪われ、焦がれるように強く惹かれた。

今までの恋とは違い、激しい衝動に襲われ、すべてを奪いたいと思った。自分のことしか見えないようにし、どこかに閉じ込めて、

そのすべてを自分で満たしたかった

大巫女になるためには乙女でなければならぬ。恋人にも慣れない。だからせめて、咲良が誰かのものにならないように側で見守りたかった。もちろん自分を知ってもらい、あわよくば好きになってもらえれば、そんな考えも抱いていた。

そのために、朱璃はどんな手段を使っても王に黄山行きを同行を認めさせるつもりだった、のだが

王は忙しく、面会を取り次いでもらうことすら出来なかった。その代わりに一通の手紙が渡される。そこには簡潔な文章で黄山行き許可の旨、そして、国宝を狙う盗賊の討伐を内密に命じる旨が書かれていた。

朱璃はすぐに盗賊を追跡させた側近に連絡を取り、西の山華^{さんか}の方へ逃走したという情報を得る。

急ぎの執務をこなし、合間に側近に任せられる仕事を分類し、各方面に細かい指示を出す。留守の間の準備を終え旅支度を整えた朱璃は、側近であり近衛隊副隊長でもある蘭丸一人を供につけ、王宮を抜け、王都の南門を目指した。

王都・立華はその周囲を高くそびえる壁が囲い、三つの門を構える。貴族の邸宅が並ぶ東門、食堂や旅籠が並び多くの旅人を迎えられる南門、工芸の盛んな西門。

南門に着いた袖希と咲良は黒鹿毛の馬を降り、歩いて南門をくぐる。朱色の門は見上げるほど大きく、咲良は倒れそうになるほど首を上に向けて、感動のため息をもらす。

「すごい大きい……、すごい人が多い……っ！」

王都に来る者のほとんどが南門を利用し、王都の中で一番にぎい、人が多い場所だった。

何度か来たことがある柚希は、物珍しそうにきよろきよろと辺りに視線を向けている咲良に小さな吐息をつく。

「咲良、頼むから側を離れるなよ。村を出るのは初めてなんだから、はぐれたら確実に迷うぞ……」

「大丈夫だよ」

満面の笑みで答える咲良に、一抹の不安をぬぐえない柚希はわずかに眉根を寄せた。

目を離れた一瞬の隙にいなくなりそうに感じて、柚希は半歩後ろを歩く咲良の手を取って握りしめる。

手を握られた咲良はふっと柚希を振り仰ぐ。

こんなふう到手をつなぐのはいつものこと。咲良が迷子にならないように柚希が手を引き、咲良の不安を取り除くように優しく握りしめる。自分を心配する幼馴染の優しさに、つい笑みがこぼれてしまふ。

視線を感じて、柚希はわずかに眉根を下げる。

警戒心のかけらのないふわふわの笑顔向けられて、柚希は急激に早くなる鼓動にぎゅっと胸が締め付けられる。

幼馴染としてしか見られていないと分かっていても募る想いにもどかしさを感じ、咲良から視線を横にそらした。

第7話 幼馴染の動揺

朱璃と落ち合う約束をしたのは、南門に続く大通りから一本奥に進んだ食堂街にある食堂千鳥亭。

木製の扉を押しあけると中央に長テーブルが三つ並び、窓側には小さなテーブルが置かれている。昼時ということもあって、席のほとんども埋まり店内は賑わっていた。

袖希は窓際に座る黒髪の青年を見つけると、繋いだ咲良の手に一瞬力を込め、人混みをかきわけて進みだした。

とんととテーブルに手をついた袖希はまっすぐに朱璃を見据える。

「お待ちせ致しました、朱璃様」

「ああ、私達も先程着いたところですよ。とりあえず、座って話をしましょう」

顔を上げた朱璃は、袖希とその背に隠れるようについてきた咲良に微笑みかける。村にきた時とは違い武具も身につけず質素な衣装を身にまとっているだけだが、その身からは気品が溢れだし辺りに花が舞うような美しい空気を醸し出している。

促されて座った袖希は、朱璃の隣に座る青年に気づきお辞儀する。細身のだが服の上からでも分かる鍛え抜かれた体、色素の薄い瞳に薄笑いを浮かべている青年からは、武人らしい堅固さと軟派な矛盾した二つの印象を受ける。

視線に気づいた快斗は少し癖のある燃え立つような赤毛を揺らし、て会釈し、テーブル越しに腕を伸ばす。

「はじめまして。王子の側近を務めている快斗です。あなたとは、

以前にもお会いしていますね」

手を握り返しながら、柚希は頷く。王子との会見の時、必ず側に付き添っていた。そして数日前、王子が近衛隊を率いて村に来た時も。

「快斗は私の側近であるとともに近衛隊の副隊長もしている、なかなか腕の立つ男です。一応、私の供を同行させないわけにはいかなかったもので、彼にお願いしました」

朱璃の説明に、快斗は人好きのする明るい笑みを浮かべる。口元には白い歯が覗き、快活な印象を与える。

「まっ、一緒に旅をするってことで、よろしくっ」

初めての旅の緊張に身を強張らせていた咲良も、快斗のあどけない笑みを見て、つられて笑い返す。

お互いに簡単な自己紹介を済ませると、快斗がテーブルの上に二枚の地図を広げる。一枚は世界地図、もう一枚は朱華国の地図だった。

とんと日に焼けた指を朱華国の地図の中央に置く。

「今いる場所はここ、王都立華の南門。で、目指すのは世界の中央にそびえる黄山」

言いながら指で直線を描きながら北に移動し、地図の上端に書かれた黄山を指す。

「最短距離はこうだけど、王都の北は険しい山脈が広がっている。行くとしたら、西の街から北上していくのがいいだろう」

これからの旅の予定を説明する快斗に柚希と朱璃は頷き返したが、咲良は食い入るように地図を眺め、目を何度も瞬かせていた。その表情には全然理解できないというように困惑の色が浮かんでいて、柚希はふうーっと大きなため息をつく。

「とりあえず、王都から西の街山華へ行くってことだ。了解？」
「うっ、うん……」

自信なさげに頷いた咲良を、朱璃と快斗はくすくすと笑いながら見つめた。

王都を発った四人は南門から西の街道をまっすぐ進み、西の街山華に到着する。昼過ぎに王都を出て、すでに日は西の山に沈んでいた。

山華は街の二方を鉱山が一方を森が囲む自然豊かな街で、鉱山からとれる色とりどりの鉱石で作られた飾り細工が市場に多く並んでいる。

街灯が灯る道を馬を降り歩く快斗が先導し、その後に朱璃、咲良を乗せた馬の手綱を握りしめた柚希が続く。

静かな道を進み目的の宿に到着すると、馬を預け、簡単に夕食を済ませてそれぞれの部屋へと向かうことになった、のだが……

「私は柚希と一緒に部屋でいいですから」

そう言って、三部屋とろつとした快斗を止めたのは咲良だった。寝るだけなのに自分一人で一部屋を使うなんてもったいないと思つた咲良は、兄弟のように育つた柚希と同室で十分だと思つたのだが。

そんな安易な考えで同室を希望したとは想像もつかない柚希と朱璃は、大きく目を見開いて咲良を見つめ、快斗は少し面白そうに瞳を揺らして笑つた。

「咲良ちゃんがそう言うなら。柚希君はいい？」

驚きを隠せずに呆然としていた柚希は、尋ねられて思わず頷き返してしまつた。

「ええ」

そんな柚希に朱璃は何か言いたそうな視線を向けていたが、何も言わず部屋に入っていてしまい、咲良も続いて部屋へと向かう。

咲良の後を追つて部屋に入った柚希は、咲良がどうしてそんなことを言つたのか掴めなくてそわそわする。咲良のことを意識する前ならば、同室でもたいして気にならなかつただらうけど、今は落ち着かない。

しばらくしてコンコンと扉が叩かれると、宿の従業員がお湯のたつぷり入つた桶を持って入ってきて、柚希はドキンとする。

「明日早いから、もうお風呂入つて寝るよね？ 私、先に使つてもいいかな？」

呆然として返事をしない柚希を振り返つた咲良は、くすりと笑つて衝立の向こうへと消えた。

さらさらと服を脱ぐ音が聞こえ、かぁーっと赤くなるのが柚希は分かった。高鳴る鼓動に突き動かされるように、落ち着きなく部屋を歩きまわっていると、パシャンツと水の跳ねる音に、胸が大きく跳ねる。

「柚希、ありがとう」

突然の言葉に柚希はびたりと動きを止めて、ゆっくりと衝立に視線を向ける。

「なっ、んだよ、急に……」

「んー、まだお礼言ってなかったな、と思って。正直、村から出た事もない私が一人で黄山まで行くなんて出来るかどうか不安でいっぱいだったから。だから柚希が一緒に来てくれて、すごく嬉しいんだよ」

まっすぐな咲良の言葉が胸に沁みて、柚希はきゅっと胸が締め付けられる。

「柚希は本当に頼れる幼馴染だね。ありがとう」

たとえ幼馴染としか思われていないとしても、咲良に頼りにされている自分に誇りを持つことが出来た。

「どういたしまして」

さっきまで高ぶっていた感情がすーっと引いていき、落ち着きを取り戻した柚希はカタリと椅子に腰をおろした。だが。

どうしても衝立の向こうから聞こえる水音や衣擦れのが気になり、ちらちらと視線を向けてしまう。

ちょうど衝立からひよこつと顔を出した咲良と視線があっ
てしま
い、慌てて顔をそらした。

「お先に。柚希もお湯使ったら？」

ほてって桃色に染まった頬、濡れて艶やかな青みを帯びる長い髪
の毛先から雫が滴り、白い夜着を着た咲良にあどけない表情を向け
られて、目のやり場に困ってしまう。

柚希は立ち上がりながら側に掛けてあった自分の上着を取ると、
咲良の頭から被せ、動揺を誤魔化すために少し意地悪な言い方をす
る。

「そんな格好してたら風邪ひくだろ。あつたかくして早く、布団入
れよ」

そう言って咲良の横を通り過ぎ、衝立の向こうに素早く移動した。
一度は平静を取り戻したのに、風呂上がりで艶っぽい咲良を見て
しまい、意識せずにはいられなかった。

なんで、俺と同じ部屋でいいなんて言ったんだ、咲良は……
くそ、俺にどうしろっていうんだよ……

口には出せなくて、心の中で悪態をついた柚希は乱暴に服を脱ぎ
捨て、湯の張られた大きな桶に体をつけた。

第8話 再会

翌日、山華で調べ物があるという朱璃と快斗と別れ、咲良と柚希別行動をとっていた。

咲良の希望で市場を見て回ることにになり、柚希はしっかりと咲良の手を握って歩きだした。

朝から山華の市場はにぎわいを見せ、人混みをかきわけて歩くのがとても大変だった。

咲良は大通りでひらかれた市場に視線を向け、濡羽色の瞳を好奇心に輝かせる。

「咲良、絶対に一人でふらふら歩くなよ……」

「大丈夫だよ。あつ、ねえ、あそこにあるのなんだろう」

あどけない笑みを見せた咲良はぱつと顔を輝かせ、柚希を引つ張って市場の人混みの中に入っていく。

「わあ、きれい……」

咲良が足を止めた出店の台には、ガラスのように光を反射して色とりどりに輝く小物入れが並び、咲良はうっとりため息をもらす。

「これ、なんですか？」

「お客さん、旅の人かい？ これはな、山華の名物・八宝彩だよ。いろんな宝石をはめ込んでるように見えるがな、元はこんな石でそれをこー極限まで薄く削るとあら不思議！ 八色に輝く宝石になるってんだ。だいたいはこちら、石の形を残して箱にするんだ」

「へえー、すごい……」

手伝いで入る予言の間には、咲良が見たこともないようなめずらしいものがたくさんある。村を出たことがない咲良にとって予言の間は別次元の世界のようだったが、目の前の出店にならぶ八宝彩の小物入れは予言の間でも見たことがなくて、咲良はきらきらと濡羽色の瞳を輝かせる。

「こんなに綺麗に八色の輝きを見せるのはこの山華でとれる八宝彩だけだ。ここでしか手に入らないよっ！」

店主の男性は食い入るように見とれる咲良に上手い文句を言って小物入れをすすめる。

大ばば様への贈り物にいいかもしれない
自分にはいいもの過ぎるが、いつも世話になっている紅葉へのお土産としてならいいかもしれないと思ひ肩から下げた鞆に手を当て、繋がれていたはずの柚希の手がないことに気づく。

「柚希……？」

ふつと振り返った視線の先に、青みを帯びた宵闇のような漆黒の髪をなびかせた男性の後ろ姿が横切り、咲良は反射的に駆けだしていた。

細い路地をいくつも通り過ぎたところで、咲良はぴたりと足を止め、辺りを見回した。

確か、こつちに来たように見えただけ……

見失った人影を求めて視線をさまよわせた時、さやさやと風が優しく頬をなでる。くすぐったさに目を細め、その視線の先、路地の角に酒場の看板を見つけ、誘われるように足を向ける。

カランカランッ。

重い扉を押しあけると、銅の鈴の音が響く。店内に足を踏み入れた瞬間、鼻につく強烈な酒精の匂いにくらくらし、眉根を寄せる。

店内は細長く、カウンターに面した席が並び、照明はわずかな明かりだけで薄暗かった。朝だというのに席は半分ほど埋まっていて、咲良は暗闇に目を凝らして、ゆっくりと歩き出した。その時。

「おいっ」

後ろから強く肩を掴まれた咲良は、強引に振り向かせられる。

「女じゃねーか」

肩を掴んだ男は、かなり酔っ払っているのか顔を真っ赤に染め、にたにたと下品な笑いを浮かべて咲良を舐めまわすように見つめた。咲良は反射的に後ずさり、肩を掴まれた手を払いのけようとしてあげた手首を、違う男に掴まれてしまう。

「きゃっ……離して下さいっ」

「いいじゃねーか、俺達と仲良くしようぜえ」

両手を掴まれた咲良は必死に抵抗したが、自分の意志とは関係なくずるずると引きずられてしまう。

「嫌っ……やめて……」

「けけけっ」

どんなに抵抗しても男の力にはかなわなくて、泣きたくもないのに視界の端に涙が溢れてきて、咲良は抵抗する気力すらなくなってしまう。そんな咲良を見た男たちは下卑た笑いを浮かべ、背中にぞわりと悪寒が走る。

その瞬間。

掴まれていたはずの手が解放されて、咲良はあつと息をのむ。

「いて、いてててて……」

咲良の手を掴んでいた男は、その手を長身の男に捻りあげられうめき声をあげ、もう一人の男は床に昏倒していた。

咲良を助けてくれたのは、艶やかな青みを帯びた漆黒の長い髪を背中に波うたせた盗賊の青羽だった

青羽は天井に向かって高く伸ばしていた手をぱつと広げて男の手を離す。男はどんと床に大きな音を響かせて尻もちをつき、昏倒していた男が目を覚ました。

「失せる」

冴え凍る瞳で睨まれ、冷やかで威圧的な声音で言われた男たちは顔を青ざめさせ、何度もつまずきながら店を駆けだしていった。

咲良は見失ったかと思っていた人物が突然目の前に現れて、瞬きも忘れて青羽を見上げていた。

扉の方へと視線を向けていた青羽はふっと視線を落とし、そこに強く輝く濡羽色の瞳があつてドキンツと胸が跳ねる。青羽の瞳が青みを強くし、甘やかなきらめきを帯びる。だが。

「あつ」

小さくもらした咲良の声に瞬き、その後にもよらない言葉が続く。

「盗賊の人っ！」

大声と共に指をさされて、青みを帯びていた青羽の瞳がくるつと黒みを深くし苛立ちの眼差しへと変わる。

咲良の声に店内の人がざわめきと共に青羽を振り返り、青羽は咄嗟に咲良をひよいつと肩の上に担ぎあげると、威圧的な雰囲気を感じながら店の奥へと足早に進んでいった。

店の奥。個室になっている部屋に入った青羽は、肩に担ぎあげていた咲良をソファアの上に放り投げると同時に、覆いかぶさるように咲良の上へと跨り、片手で頭の上に持ち上げた咲良の両手を押さえつけ、もう片方の手で口元を塞いだ。

氷のように冷たい眼差しを向けられた咲良は、世界のすべてを憎むような反逆の瞳に、条件反射で体を小刻みに震わせる。

「よくも人前で、盗賊だと言ってくれたな。いい度胸だ」

言いながら青羽は、口元に当てた手をゆっくりと動かし、なまめかしい手つきで咲良の唇をなぞる。

背筋をぞわぞわとしたものが駆け廻り、頬がかあーっと赤くなる。

すぐ目の前に冷たく見えるほど整った顔立ちが迫り、ドキッとするほど澄んだその眼差しに強く見据えられて、鼓動が早鐘のように鳴りだす。

「ずっと俺の後をつけていたな、何が目的だ」

その声があまりにも冷たくて、何もかもをも憎むような孤独に濡れていて、引っこんだと思っていた涙が溢れ、じわじわと視界の端をにじませる。

違う

そう口を開きたかったのに、青羽に対する恐怖心から震えが止まらなくて、声が出ない。泣きたいわけじゃないのに思うようにならなくて、もどかしくて……

咲良は嗚咽を堪えてひゅっと息を吸い込んだ。

瞬間

頭上で強く握られていた手の拘束が解かれ、咲良の上から青羽がすつと身を引いた。ソファから数歩離れた所で咲良に背を向けた青羽はかすれた声を出す。

「すまない……」

ぼつつとこぼされた言葉に、咲良は目をしばたいて顔を上げる。

「えっ……」

「泣かせたいわけじゃないんだ」

そつけない言い方だが、その中にふくまれた優しさに、咲良は胸がつかまる。

青羽は気まり悪そうに眉根を寄せ振り返り、咲良の大きな瞳から澄んだ雫が伝い落ちるのを見て、困ったように顔を歪ませる。その瞳が、急激に青みを帯びていく。

「泣くな」

青羽は咲良に近づいてソファの前に片膝をつき、曲げた指の先で優しく涙を拭ってやった。

その声があまりにも優しく、ドキっとするほど澄んだその眼差しの底には切ないきらめきがあり、気品に満ちた色香を漂わせ、咲良は胸をつかれた。

息が止まるほど見つめられて、周りの時だけが止まったように静寂に包まれ、世界に二人だけしか存在していないように感じてしまふ。

甘やかな空気が二人を包み、頬に触れていた青羽の手が咲良の耳元を優しくなでる。

徐々に近づいてくる青羽の顔。

唇が触れそうな距離。

青羽の瞳が艶やかにきらめいて、咲良はゆっくりと瞼をとじた

第8話 再会（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです！

第9話 気になる存在

「あー……」

気まずそうな声が頭上から掛けられて、咲良の唇に触れようとしていた青羽はぴくっと肩を揺らす。

その声が誰なのか、ここがどこなのかを瞬時に思い出した青羽は慌てて咲良から距離を取り、今自分がしようとしていたことを思い出して、かぁーっとその頬を赤く染めた。

男に絡まれている咲良を助けた時も、部屋に入ってから、ずっと青羽の側にいた快斗は、すっかり自分の存在を忘れてしまっている二人を見ているのが恥ずかしくていたたまれなくて。

気を効かせてそのまま声をかけずに部屋を出ようかとも思ったが、大事な話の最中だったことを思い出して、声をかけることにしたのだった。

きまり悪そうに眉根をよせる青羽に視線を向けた快斗は、申し訳なさそうに眉尻を下げる。

「悪い、止めない方が良かったかい？」

快斗の気遣いに、自分の行為を誤魔化すように額にかかった髪を大きくかき上げた青羽は、ぽんっと肩を叩いて、青みを帯びていた瞳を黒くさせる。

「いや、助かった……」

そのまま部屋の隅まで歩き椅子に腰を下ろすと、長い足を汲んで

大きな吐息をもらす。

すつと細めた瞳を咲良に向け、青羽は冷たく言い放つ。

「俺はあんたに構ってやるほど暇じゃないんだ、さつきみたいな目に合いたくないなら、さつさと失せな」

陰りを帯びた瞳が怖くて、だけど、その奥のあざやかな輝きに惹かれてしまう。いつの間にか、もっともつと青羽のことが知りたいと思っていた。自分の気持ちに気づいてしまった咲良は、頬を真っ赤に染め、それからちらつと視線を青羽に向ける。

国宝を狙う悪い盗賊。

自分と紅葉を敵国の兵から守ってくれたが、その礼と言って自分の唇を奪った。

息が止まるほど美しい漆黒の瞳はその底に反逆の炎を燃やして、見つめられるだけで恐怖に身が震えた。だけど

気づいたら後を追いかけていて、気になって仕方がなかった。

こんなふうには、誰かのことを知りたいと思ったのは初めてで、咲良はその気持ちを何と呼ぶのか分からなかった。ただ、もっと知りたいし、側に近づきたいと思った。

その時になつて、咲良は男の名前すらまだ知らなかったことに気づいて、どんと好奇心が膨らんでくる。

「嫌です」

咲良は勇気を振り絞り、青羽を見つめて言っていた。

「私は、あなたのことが知りたいんです。だから側を離れません」

「、勝手にすればいい」

青羽はそっけなく言い、視線を窓の外に向けた。

数カ月探し回ってやっと掴んだ情報だった。王都で国宝を守っているはずの大巫女が王都と東の街の間の小さな村に居るということを

知華村に行ってみると、そこにはなぜか隣国の兵はいるし、大巫女はいたけれど国宝はないと言われ、頭である青羽の判断でその場はとりあえず引くことにした。

大巫女の言葉を完全に信じたわけではないが王軍が駆けつけてきたこともあって、知華村から逃走し、王都を通り過ぎ山華へと足を向けた。

情報収集後、今後のことを話すためにいつも利用している酒場へと入った青羽と快斗は話を始めて少しした頃、ガタリと椅子を勢いよく倒して青羽が立ち上がった。

その時、青羽の瞳が深い青色を帯びて揺れていることに、快斗は気づいていた。

盗賊団の中では一番付き合いが長く、青羽のことは自分が一番よく分かっていると思っている。青羽が必死になって国宝を探すと言いだした訳も、濡羽色の美しい瞳に青みを帯びる理由も

その瞳に青みを帯びるのは、胸の内に激情が渦巻いている時。

知華村を出る時も、青羽は憂いを帯びたせつない表情で村を見ていた。

礼の代わりといってキスをするような軽い男でもないことも知っている。

だから余計に青羽のことが心配だった。

青羽が一目散に少女に駆け寄り、目にも止まらぬ速さで男を殴り倒し、肩に担いだ少女が知華村にいた巫女見習いの少女だと気づい

て、快斗は動揺に大きく目を見開く。

それから、店の奥の個室での二人のやり取りを見ていて、青羽自身はまだ気づいていない気持ち、快斗は敏感に感じ取ってしまった。

青羽はソファーに背を向けて座り、そんな青羽をソファーに浅く腰掛けた咲良が瞳をそらさずにと見つめていた。

ソファーの側に立っていた快斗はふっと咲良に視線を向けて片目をすがめ、ゆっくり青羽に近づくと、ぽんっと肩に手をかけ腰を折って耳に顔を寄せる。

「青羽、いいのかい？ 彼女は俺達が盗賊だつて知ってるんだぞ。

側に置く危険はあつてもいいことなんてないだろう？ とつと追いついた方が……」

普段は青羽の意見に反対することは滅多にない快斗だったが、青羽がどういふつもりで勝手にすればいいなどと言ったのか理解できなくて、眉尻を下げてささやいた。

青羽は肩越しに快斗を振り返ると、青みを帯びて揺らしたその瞳の底に、あでやかで残酷は光を輝かせる。

その鋭い光に、快斗はドキンとする。

「小娘一人に俺達は捕まらないさ。それに大巫女に仕えていた娘だ、なにか国宝について聞きだせるかもしれない。利用させてもらうさ

」

口元に嗜虐的な笑みを浮かべ、だけど気品に満ちた色香を浮かべたその顔はどこまでも美しく、ぞくりと毛が逆立つのを感じて、快斗はぎゅっと奥歯を噛みしめた。

咲良に惹かれながら、どこまでも盗賊としての態度を崩そうとしない青羽の固い決意を感じて、快斗はもどかしく思いながらもそれ以上は口出しするのをやめた。

腕に抱きしめたやわらかい感触を思い出して、どこまでも澄みきった純粹な瞳に見つめられて、気が付いたらキスしようとしていた。快斗が止めに入らなければ、何をしていたか自分の行動にも自信がなかった。

体の内から溢れだすような激しい衝動にかられて、それを必死に抑え込む。

もっと触れていたかった

そう思ってしまった自分に舌打ちし、ちりちりと痛む胸に舌打ちをする。苛立つ気持ちを押さえ、青羽は鋭い眼差しを窓辺に向けた。

「それよりも、さっきの話の続きだ」

話題を切り替えることで、無理やり咲良のことを思考から追い出す。

「蒼馬国も国宝を狙っているというのは確かなのか？」

「確かだよ。げんに知華村にいたのは蒼馬国の兵だったし、噂では蒼馬の国宝も行方不明だとか……」

「同じ物を狙っているのなら、先を越されないようにしなければならぬ」

「ああ、厄介だな」

快斗はぎゅつと奥歯を噛みしめ、青羽は思案げに眉根を寄せる。

そんな二人を少し離れたソファ―に座って見ていた咲良は、小声で話していたからすべての会話の内容は分からなかったが、国宝という単語を聞きとって、だいたいの予想をつける。

知華村に来ていたのは、大ばば様が持っている国宝を奪うためだったのよね。でも失くしたと言われて諦めたと思っていただけ、まだ探している？

だとしたら、何のために？

結局は疑問が増えてしまい、咲良は一人首をかしげた。

第10話 盗賊の秘密

四つの大国にはそれぞれ黄帝から下賜された国宝が存在し、朱華国ではその国宝を歴代の大巫女が管理することになっているが、十数年前に失われていた

その失われた国宝を今になって隣国や盗賊が狙っている。

国宝にどんな価値があるのかを知らない咲良は、なぜそこまで必死に探し求めているのか不思議でならなかった。

金銭的な価値を求めているのならば、国宝以上にもっと金目のものはたくさんある。むしろ、神聖な宝としての価値以外、どんな利用目的があるのかすら分からなかった。

「どうして国宝を探しているの？」

あまりにも直球で投げられた質問に、振り返った青羽と快斗は瞳目して咲良を見つめた。

思ったことをすぐに口にしてしまうのは咲良の良いところでもあり悪いところでもあるが、ぐだぐだ考えるよりも聞くのが一番確かな方法だと、本能で知っているのだ。

こんなにも裏表なくまっすぐに聞かれると、警戒心をなくして素直に答えてしまいそうになる。

「それはだね……」

つい親切に教えてしまいそうになった快斗ははっと口をつぐみ、それから苦笑して青羽に視線を向ける。

困ったように眉尻を下げ、肩を落として首をかしげる。お手上げ

だとてもいうような仕草に、青羽はくつと俯くと皮肉気な笑みを浮かべて咲良を優しく睨んだ。その瞳にあざやかな光が浮かび上がって、咲良はドキッと胸が高鳴った。

「あんたは本当にまっすぐだな」

端正な顔に一瞬、もどかしげな影が浮かび上がってすぐに消え、青羽はちよつと息をついて咲良をまっすぐに見つめた。

「いいだろう、教えてやるよ。なぜ俺達が国宝を探しているのか」

咲良は息を飲んで青羽の言葉を待ち、青羽の横に立っていた快斗は片眉をあげて心配そうに青羽を見、それから近くの椅子を引き寄せて静かに腰を下ろす。

椅子の深く腰掛けて座る青羽は腕組みをし、艶やかな髪をさらつと揺すって静かに話し出した。

「半年前、うちの頭が病に倒れた。医者に診せても医学の心得のある者に診せても原因は不明、半年間ずっと昏睡状態だ。なんとか病を治す方法がないかと探している時に、隣国で国宝の噂を聞いた。黄帝が与えた国宝には神力が宿り、特に朱華国の国宝はどんな病でも治すことができる力があるという言い伝えがあると」

青羽はそこで言葉を切り、ぎゅっと手を握りしめる。少し目を細めたその顔はせつなげで、でもかたくなで、何かを胸の中に強く抱えているような強さがにじんできた。

「だから知華村に大巫女がいると聞いて行った、国宝を手に入れるために。国宝さえあれば頭を助けることが出来るかもしれない……」

その言葉の中には藁にもすがるような思いつめた響きがあり、咲良の胸をつく。

沈黙を破ったのは、カタンという椅子の音。

快斗が立ち上がり、咲良にゆっくりと近づいてきた。

「頭は今では昏睡状態だが、いつ危うい状態になるか分からない。だから一刻も早く助ける方法を見つけなければならぬ。そのために青羽は頭になり、みんなをまとめて国宝を探している。君、大巫女に仕えているんだろ？ なんでもいいから国宝について知っていることがあれば教えてくれないかい？」

青羽ばかりに見とれていて、この時初めて快斗をまっすぐ見た咲良は呆然としてしまう。

少し長めの髪はとても柔らかそうな茶色で、顔立ちは彫が深く整っていてもハンサムだった。

青羽は触れた者を切りつけるような鋭く妖艶な美しさだが、快斗は誰からも好かれるような爽やかな印象を受ける。

あまりの美貌に思わずため息をついてしまった咲良は、はっとして口を開く。

「役に立てればどんなにいいかつ。でも……私は巫女見習いの半人前なんです、国宝についてはなにも聞いたことがありません」

咲良は勢い込んでいい、だんだんと肩を落として小さな声になっていく。青羽は濡羽色の瞳に一瞬、憂いを帯び、それから鮮やかな黒に染めてすつと立ち上がり、歩きながら言った。

「国宝について何も知らないならば、これ以上あなたに付き合っている暇はない」

その声は突き放すように冷たく拒絶を示していて、咲良は胸が痛かった。青羽の必死な想いを知り、どうにか頭を助けてあげたいと思った。

それなのに、すべてを憎むような反逆の瞳に睨まれて、居すくまっつて、後を追うことも出来なかった。

震える体を必死に抱きしめて、こぼれそうになる涙をぐつと堪える。

パタンつと閉まる扉の音が室内にやけに大きく響き、瞳からポロポロと涙がこぼれ落ちる。

巫女になろうと思ったのも、その力で人を幸せにしたいと思ったからで、それなのに自分は未だ半人前で精霊の声さえ聞けず、誰かの役に立てたことがない。それどころか、誰かに助けられてばかりだった。

隣国の兵に襲われた時も、黄山への旅も、いつもいつも助けられている。不甲斐ない自分が悔しくて、だからこそ、いま自分でできる精一杯で人助けをしたいと思った。

青羽のために何が出来るか分からなかったけど、咲良は青羽の力になりたかった。

不確かな未来、だけど確かに咲良の胸の内に小さな気持ちが芽生える。

その気持ちに突き動かされるように、震える足に力を入れて立ちあがろうとして、踏ん張りきれなくてソファから転げ落ちて尻もちをつく。痛みに顔をゆがめて、両手を床につっぱって立ち上がると、咲良は駆けだした。

酒場を出た青羽は、山華の街を囲む山へと足を向けた。

青羽は咲良を絡まれる男たちから助けたことを後悔していた。

ただあの時は、気が付いたら男を殴り咲良を助けていた。名前も知らない一度会っただけの少女なのに、視界に彼女を捕えた瞬間、考えるよりも先に体が動いていた。

蝶が花の甘い香りに誘われるように、青羽も目には見えない何かに惹きつけられるように咲良をその腕の中に抱いていた。

自分のことを知りたいと言った咲良に、気まぐれで勝手にすればいいと言ったが、国宝のことを聞きだすのではなく、逆になぜ自分が国宝を探しているかを教えてしまい、やりきれない気持ちだった。

頭が病に倒れ動揺する仲間をまとめるために頭代理に名乗りを上げ、病を治す方法を探して数カ月間駆けずり回ってきた。

頭のため、仲間のため、自分が今何をやらなければいけないのか、そのことを忘れたわけではないが、どうしようもなく咲良のことが気になって、切なく痛む胸に気持ちが揺れてしまう。

盗賊になったことを後悔はしていないが、汚いことばかりしてきた青羽には咲良のあのまっすぐな眼差しが眩しすぎて、妬ましくて苛立った。

こんな気持ちになるならば、あの時助けなければ良かったとひどく後悔をしながら、街の明かりを背に受けながら、山道を登り始めた。

第11話 襲撃

薄暗い山道をしばらく進んだ時、茂みの方から人の気配を感じ、青羽は視線を上げた。

「よお、久しぶりだな、青羽」

「竜司」

青羽は不愉快そうに眉根を寄せ、茂みの中から現れた人物を睨みつけた。

竜司と呼ばれた男は、青羽よりわずかに背が高く、着崩した着物の上から狼の毛皮をまとい、着物の上からでも分かる形の良い筋肉質な体、赤茶の髪を頭の上で一本に結わいている。日に焼けた精悍な顔には頬に大きな刀傷があり、それがより一層強靱な印象を与える。

「お前、頭になったそうじゃないか」

竜司はあざやかで、不敵な笑みを浮かべて、ざくつと地面を踏みしめる。

「何しに来た？」

青羽は竜司の言葉を無視して、静かにだが威圧的に言い放ち、冷やかな眼差しを向けた。

その視線を受けた竜司は気分を害する様子もなく、不敵に口元を歪める。

「何しに来た、だって？ それはこっちのセリフだ。ここ山華の山は俺達山賊の縄張り、余所者に入りこまれちゃ困るんだよな」

にたにたと口角を上げ、その瞳に妖しい光が濃くなる。

ざざつと竜司の背後から茂みを踏み分ける音が続き、そろそろと山賊が現れる。その数はおよそ三十人。

いつのまにか青羽と快斗の背後からも山賊が忍び寄り、気がついた時には周りを囲まれていた。

「そろそろ決着をつけようぜ、青羽」

竜司の瞳がざらりと光り、あざやかな笑みを消して青羽を憎々しげに睨みつけた。

青羽は朱華国のあちこちに隠れ家を持ち世界中を駆けまわる盗賊団の一員で、今や頭におさまったという。そんな青羽に対して、竜司は山華の山の山賊の頭にしか過ぎない。

二人が出会ったのは数年前。元々、山賊は自分たちの縄張りに隠れ家を持っている盗賊団を敵視し、その時も山華にやってきた盗賊団に山賊から戦いをしかけたのだった。

当時、お互い頭になる前で、初めて会った二人は斬り合いになり……

青羽がわずかな力の差で竜司の顔に傷をつけることとなった。

それ以来、竜司は青羽に対して個人的な感情を抱き、会うと必ず喧嘩をしかけてくるのだが、今回は用意周到に山賊団総出で青羽を取り囲む竜司の意気込みに気圧される。

盗賊団でも一、二を争う腕前の青羽と快斗ならば、相手が数人ならば二人だけでも簡単に蹴散らすことが出来る。だが、二人を取り囲むのは三十人。

分の悪い状況に、青羽と背中合わせに立った快斗はぎりりと奥歯

を噛みしめ、苛立たしげに山賊を睨み据えた。

「竜司、こんなやり方はお前らしくないだろ？」

二人の喧嘩を側で見してきた快斗は、竜司が青羽に対する気持ちは傷を受けた恨みとかではなく、ただ単に負けたことが悔しくて青羽との喧嘩を楽しんでいるように思えた。だから、こんなふうで大勢で襲ってくるのは竜司のやり口ではない。

「そつだ、お前たちに構っている暇はない。構ってほしければ、また今度にするんだな」

不愉快そうに竜司を睨みつけた青羽に、竜司は刀を抜きながら叫んだ。

「お前の、そういう所がむかつくんだよ　っ！」

突然切りかかってきた竜司に、青羽は反射的に刀を抜き受け止めた。ぱちぱちと火花が飛び散り、お互いに間合いをとる。

竜司の一撃を合図に、他の山賊が青羽と快斗目がけて襲いかかってきた。

二人は仕方なく数人で襲いかかって来る山賊をなぎ払っては、自分たちを囲む山賊の輪の切れ目を目指して駆け、そして切りかかって来る山賊の相手をした。

青羽には竜司の攻撃の切れ間に他の山賊が襲いかかり、気を抜く暇も与えずに攻撃がしかけられ続けた。

腕に自信がある青羽でも、こつも次々に攻撃を仕掛けられてはきりがなかった。辺りには数人の山賊が意識を失くして倒れていたが、青羽も快斗も満身創痍で状況は良くなかった。

じわりと額に汗がにじみ、顔に張り付いた髪を取り払おうとした

時、青羽がなぎ払って地面に転がった山賊の刀にけつまずき、体勢を崩す。

その隙をついて、山賊の一人が鋭い動きで刀を振り下ろしてきた。青羽は体勢を崩しながらも、片膝と片手を地面について刀の柄で相手の胴をついて昏倒させる。

安堵の吐息を小さくもらした時、青羽は殺気を感じて反射的に振り返る。

背後には赤茶毛をなびかせて立った竜司が、青羽めがけて刀を振りあげたところだった

第12話 だれかのために

青羽の後を追って酒場の外に飛び出すと、日はすでに西の山に沈みはじめ、辺りを赤く染めていた。

早く追いかねなければならぬのに、通りと見回しても青羽の姿はなく通りのどちらに行ったのかも分からなくて、咲良はためらう。急ぐ気持ちとどこに行けばいいのか分からない戸惑いに、どんどん鼓動が速くなり、息が苦しくなる。

その時。

さやさやと優しい風が頬をなでていき、くすりと小さな笑い声が聞こえる。

“山だ……あなたが探している人は山に向かった、急ぎなさい”

心に溶け込むような澄んだ優しい声音が脳裏に響き、ぶわりと鳥肌が立つ。

咲良は反射的にぱつと振り返り辺りを見回したが、夕陽に照らされた通りには咲良以外の人影はなかった。

咲良は恐る恐る両耳に両手をあて、囁くような声を出す。

「もしかして……風の精霊……？」

すると、優しい風が吹き抜けて、くすぐるような笑い声が聞こえる。

“そつだ、やっと気づいてくれたのだな。私はずっとあなたに話しかけていたのだよ、巫女”

「巫女……?」

咲良は戸惑いがちに言葉を発し、首をかしげる。

私に言ったんだよね ?

そう思っても、答えてくれる人の姿がなくて困ってしまっ。

“ さあ、急ぎなさい ”

ぶわりとひと際大きな風が吹いて、夕陽の沈みゆく西の山に消えていった。

咲良はどきどきと高鳴る胸を押さえて、大きな濡羽色の瞳を見開く。

今まで何度も聞こうとして聞こえなかった精霊の声。初めて聞こえた、しかも自然の多い森ですらほとんど聞きとることが出来なかったのに街で聞いたことに驚きを隠せなかった。

どうして突然聞こえるようになったのかしら

そんな疑問を抱いて立ちつくしていると、急かすように咲良の周りに風が吹いて、咲良は勢いよく頭を左右に振って西へと駆けだした。

巫女見習いでも、神力が使えなくても、いま自分にできる精一杯で青羽の力になりたいと思った。

そうして思いついた、自分にできる唯一のこと

咲良はもつれそうになる足を必死に動かして通りを抜け、山道を駆けあがった。

村から出たことなかった咲良は山道を登るのも、こんなに必死に駆けたのも初めてのことだった。そこまですて咲良を突き動かすのは、人を幸せにしたいという気持ち。誰かのために、青羽のため何かをしたいという強い気持ちからだった。

何度も転びながら、咲良はひたすら走り続けた。

どのくらい走っただろうか。息が苦しく、肩で呼吸を繰り返しながら重い足を必死に動かしていた咲良は、視界の先でうごめく複数の人影を見つける。

暮れかかる夕闇の中で、集団に囲まれている青羽と快斗。快斗は三人の山賊に囲まれ、じりじりと間合いをとり、青羽は一人の男を昏倒させた弾みに体勢を崩して、そこをつくように別の男が襲いかかって来る。

咲良は走りながらあつと息を飲み、間一髪で青羽が男を倒したのを見て安堵する。だが、うずくまる青羽の背後にゆらりと立つ人影に、咲良は無我夢中で足を動かした。

地面に片膝をついた肩であらく呼吸を繰り返していた青羽は、背後に感じた殺気に反射的に振り返った。

そこには頭上で縛った赤茶毛を風になびかせて立った竜司が、刀を振りあげたところだった。

青羽は咄嗟に動くことも出来ず、襲ってくる衝撃に備えて体を強張らせた。

振りあげられた刀は勢いよく青羽の胸めがけて振り下ろされた。

だが、青羽の体に刀が当たる直前、なにかが青羽と竜司の間にすりこむ。

ザシュツという何かを切り裂いた鈍い音が響いて、青羽は漆黒の瞳を大きく見開いた。

その視界にさらりと揺れた豊かな濡羽色の髪が意志を持ったように広がり、そして次の瞬間、小さな体が地面に転がった。その肩からは鮮血が流れ出していた。

切りつけられたはずの青羽には傷もなければ痛みもない。

竜司の刀が振り下ろされる瞬間、青羽と竜司の間に咲良が飛び込み、青羽をかばうようにして立ちふさがった咲良が竜司の刀を受けたのだった。

「　っ!？」

思いもかけない事態に青羽は瞳を大きく揺らし、胸をつかれる。

「なっ……………」

竜司も自分が切りつけたのが青羽ではないことに気がついて、驚きの声をあげ、わずかに肩を震わす。

「おい…………、おいっ!」

雪のような肌は今青白く、吸い込まれるような濡羽色の瞳は閉じられている。青羽は怒りと悔しさに、地面に倒れる咲良を揺さぶり何度も呼びかけた。

「おいっ……………」

長い睫毛が震えて、濡羽色の瞳がわずかに開き、その視界に青羽をとらえてふつと揺て、笑みを浮かべる。

「よかった………… あなたが無事で………… こんな私でも役に立てて……………」

伸ばされた手が青羽の頬に触れ、ひやりとしたその手の冷たさに青羽は切なげに顔を歪め、瞳に青みを帯びて咲良を掻き抱いた。

「なんで他人のためにそこまで必死になれるんだっ」

青羽の悲鳴のような掠れた叫びに、山賊を蹴散らした快斗が駆けよって来る。

「青羽……どうなってるんだ……」

快斗は目の前の状況が理解できなくて、ぎゅっと眉根を寄せる。青羽は瞳に苛立ちをにじませ、咲良を右腕に抱きかかえたまま左手で刀を強く握うとその切っ先を竜司につきつけた。

「俺と決着をつけたいなら一対一で勝負しろ。今からでもかまわない、だが俺はお前に負ける気はしない」

静かに激しく萌える怒りの感情を秘めた威圧的な青羽の言葉に、竜司はぞくりと背筋を震わせる。

満身創痍の青羽、立つことも出来ないこの状況では、だれが見ても竜司の方が有利だった。だが、青羽の体の内からみなぎる闘志、ぴりぴりとした緊張感に飲まれて、不覚にもひるんでしまった自分が悔しい。

苦々しげに唇をかみしめた竜司は、周りで竜司の様子をうかがっている仲間に気づいて、ちっと舌打ちする。

「勝負は延期だ、今回はお前を逃がしてやる」

戦ったら負けるかもしれない　そう思ってしまった敗北感を隠して、尊大に青羽に言い捨てる。

「行くぞ」

そう言って歩き出そうとした竜司は、ふつと青羽を振り返る。

竜司から一瞬も視線をそらさずに見据える青羽の瞳は、すべてを憎むような鋭い光がざらりと反射する。その瞳が複雑に青みを帯びていて、心臓を握り潰されたような衝撃が走る。

「竜司、お前がしたことは許さない」

脅威を与える鋭い眼差しに睨まれて、竜司は目をすがめて青羽を見つめ、無言のまま茂みの中へと消えていった。

第12話 だれかのために（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです！

第13話 自覚

「大丈夫かい……?」

山賊の気配が辺りから消えたのを確認してから、快斗は青羽に気遣わしげな声をかける。

竜司が姿を消した方角を睨み据えていた青羽は、快斗の声に、ゆっくりと瞬きし、苦しげに眉根を寄せる。

「ああ、俺は大丈夫だ。それより……」

そこで言葉を切り、右腕に抱きしめたままの咲良に視線を向ける。

「俺をかばって、こいつが怪我をした。早く、手当てしてやらないと……」

「隠れ家につれていくのかい……?」

その声に批判的な色はにじんでいなくて、ただ静かに問いかける快斗に、青羽は無表情のまま頷く。

「放っておくことはできないだろう……」

言って苦笑した青羽の表情はどこか儂げで、普段の威圧的な雰囲気からは想像も出来ないほど人間らしい表情で、快斗は息を飲んだ。

口に押し当てられる柔らかい感触に、咲良はまどろみに中からゆっくりと覚醒する。

瞳を開けると、端正で陰りを帯びた切なげな表情が間近で自分を見つめていて、一瞬、夢かと思う。

だけど、ふっと笑みをもらった瞬間走った肩の痛みを顔に歪め、これが現実なんと自覚する。

「気がついたか……？」

少し掠れた低い声に尋ねられて、咲良は上半身を起こしながら辺りを見回して首をかしげる。

見覚えのない室内は薄暗く、ひんやりとした空気が漂う。岩で出来た天井と壁はでこぼことして、壁の数か所に掘られた場所に灯火が置かれ、揺れる光が室内をほのかに照らしている。調度品は咲良が寝ている質素なベッド、青羽が座っている椅子、中央には手作りだと見てとれる机、扉の側に小さな棚が置かれている。

「はい、ここは……？」

言いながら、咲良は気を失う前の出来事を思い出して、勢いよく青羽を振り仰ぐ。その瞳は痛々しげに揺れていた。

「あつ、怪我はしてないですか？」

飛びつくように青羽の腕を掴んで体中を見回した咲良は、そこに大きな傷を見つけたことはなくて、ほっと胸をなでおろして泣き笑いを浮かべる。

「よかった……」

青羽を守ることが出来てよかった。

その気持ちが言葉としてもれてしまっていることに咲良は気づかず、安堵の表情を浮かべる咲良を見て青羽はぎゅっと眉根を寄せる。

「どうして俺をかばった？　なぜ、他人のためにそこまで必死になれるんだ？」

険しい表情を浮かべた青羽の瞳が泣きそうに揺れているように見えて、咲良はきよとんと首をかしげる。

なぜ　その理由は簡単だった。

「私、両親がいないんです。でも寂しくはありません、大ばば様や村のみんなが可愛がつてくれて、たくさん幸せな気持ちをもたらせて。私もそんなふうに誰かを幸せな気持ちにしたい、誰かの役に立ちたい、そう思うようになって巫女になりたいと思っただんです。だから、あなたの役に立てて嬉しいですよ」

くすりと微笑んだ咲良は、直後、肩の痛みにきゅっと眉根を寄せ、肩に手を当ててうずくまる。

「まあ、まだ見習いですが……」

痛みを誤魔化すように苦笑する。

山の中腹にある洞窟の中の隠れ家に咲良を連れてきた青羽は、すぐに肩の傷口の治療をした。出血は止まったが、竜司の刀を正面からまともに受けている。大男でも一晩はうなされるようなその傷が、華奢な体の少女にとってどれほどの痛みなのか青羽には分かっていた。

る。

それなのに、自分の怪我を気にするよりも先に、二度会っただけの他人のことを気にしている咲良のことが理解できなかった。

自分をかばって咲良が怪我を負った時、青羽は言い知れぬ感情が体の内から燃え上がり、それまで押さえていた理性を焼き尽くした。惹かれている

認めまいとしてきた感情を認めざるを得なくて、だけどそんなことよりも、咲良が自分をかばったことが衝撃すぎて苦しかった。

両親を知らないのは青羽も同じだった。だが、誰かの役に立ちたい、そんな風に考えたことはなかった。

盗賊団として生きる為に誰かを傷つけ奪うことはしても、自分以外の誰かを思って動いたことはなかった。すべては自分のため

「あんたはすごいな……そんな風に考えたことはなかった」

青羽はなんとも言えないような、泣き笑いのような表情を浮かべる。

「咲良……」

「えっ？」

ぼつんと漏れた咲良の言葉に、青羽は片眉を上げる。

「あんたじゃなくて、私の名前は咲良です」

そう言って咲良は恐々といった様子で青羽を見上げる。

「あなたの名前は？」

いまだ青羽の腕を握っている咲良は、息が触れそうな距離にある

端正な顔に見とれなが尋ねた。

息が止まるほど美しい濡羽色の瞳はその底に反逆の炎を燃やして、見つめられるだけで恐怖に身が震えた。だけど今は

自分のことを知ってもらいたい。相手のことを知りたい、もっと近づきたい。

胸の内に芽生えた好奇心が勝って、わずかな恐怖心を押しつけて、咲良は尋ねずにはいられなかった。

青羽はわずかに片眼を見開き、浅く、ほんのわずかに笑う。

咲良はなぜ笑われたのか分からなくて、くるりと瞳を好奇心に揺らして青羽をまっすぐに見つめた。

「俺の名前は青羽だ、咲良」

そう言った青羽は自分の腕を掴んでいた小さな手をとり握りしめると、そつとその甲に口づけを落とす。上目使いに見上げ、咲良がかあーっと頬を赤く染めるのを見て、その瞳にうっとりするほど甘い光を帯びる。

好きだ

心を占める感情に、青羽の瞳が急速に青みを深くする。

魅惑的な瞳にいくにいるように見つめられた咲良は、きゅっと胸を締め付けられる。射止めるようなその眼差しに、体の底から湧きあがるしびれに目眩がする。

手の甲から、肘、肩と、どんどん咲良に近づいてくる口づけに、すべてを奪われそうな感覚に急に怖くなる。

自覚した気持ちと甘い香りに引き寄せられて、膨れ上がる激情のまま口づけを繰り返した青羽は咲良の耳たぶに歯をたてて甘噛みし、そのまま吸い寄せられるように咲良の唇に近づき、ふっと動きを止めた。

このまま、すべてを自分のものにしてしまいたい

溢れだす感情に突き動かされていた青羽は、目の前で強く目を瞑

り、体を強張らせている咲良に気づいて、ゆっくりと咲良から体を引いて距離をとる。

「このままさらってしまいたい気分だがな……」

皮肉気に囁いた青羽の言葉は掠れすぎていて、咲良の耳に届くことはなかった。

第14話 約束

すぐ側にあつた温もりが消えたことに気づいた咲良は、恐る恐る瞳を開ける。

青羽は椅子から立ち上がり、ベッドから離れた棚の前でなにかをぶつぶつ呟いていた。

咲良はその様子を不思議に思いながらも、覚醒してく思考の中で、なぜ青羽を山まで追って来たのかを思い出して、掛布をめくり足をベッドから下ろして青羽の側に近づいた。

「青羽？」

突然、真後ろから声をかけられた青羽はびくっと肩を震わせて振り返り、動揺に瞳を揺らす。

「どうしたの？」

一度口を開きかけ、青羽はきゅっと奥歯を噛みしめて小さな吐息をもらす。

「……いや、なんでもない」

自分に向けられるまっすぐで純粋な瞳に慣れなくて、咲良から視線をそらして青羽はぎこちなく答える。

その横で咲良は耳に手をかけてなにかもぞもぞと動かす。それから、青羽の手をとって広げると、そこに小さな耳飾りを乗せた。

青羽は手のひらに転がった耳飾りに視線を向ける。それは紅玉に

薔薇の形を施し、繊細な美しさを放つ耳飾りで、そこからは目に見えないが激しい活力が溢れだしているようで、その力強さに飲み込まれそうになり、青羽はぎゅっと眉根を寄せる。

「これは……？」

「私が生まれた時から身につけている物です。これにも神力が宿ると大ば様が言っていたのを思い出して、頭さんの病を治すのに役立つことが出来るかもしれません」

国宝を探しながらも、実際は黄帝など見たこともないし神力など不確かなものを信じてはいなかった。

でも、手のひらの耳飾りからみなぎるすさまじい活力に、青羽はごくりと喉を鳴らす。

神力が宿るといふ言葉を信じさせるだけの力があつた。

「いい、のか……？」

竜司からの攻撃から身を呈して守り、その上、頭のためにと神力の宿る耳飾り　神宝を、なんの見返りも求めずに差し出す咲良を、揺れる瞳で見つめる。

「はい」

強く、だが優しく頷いた咲良は、幼さの残る顔にあざやかな笑みを浮かべる。

青羽はぎゅっと拳を作つて耳飾りを握りしめる。

ありがとう

そう礼を言おうとして上げた視線の先で、咲良の華奢な体がぐらりと揺れるのを見て反射的に腕の中に抱きしめた。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫です、ちょっと目眩がしただけで……」

青羽の体からわずかに距離をとった咲良は、額に手を当てながら掠れた声で呟く。だが、その顔面は青白く、とても平気そうには見えなくて、青羽は眉根を寄せて険しい顔つきで咲良を睨んだ。

「どこが大丈夫なんだっ。もういい、もう少し横になれ」

「きゃっ、大丈夫です。それに、そろそろ戻らないと柚希が心配しているかも……」

有無を言わず咲良を抱き上げてベッドに連れて行こうとした青羽に、咲良は弱々しい抵抗をする。青羽はちっといまいましたように舌打ちし、咲良を床に下ろす。

抵抗されたことよりも、咲良の口から出てきた男の名前に苛立ち、そんな自分を隠すように表情がすっと険しくなる。

「本当に大丈夫なんだな？」

冷たい声音にびくつと体を震わせた咲良は、泣きそうになってしまっつきゅつと唇をかみしめる。

「はい……」

「そんなに青ざめた顔をしてか？」

「この目眩は耳飾りのせいなんです、たぶん」

その言葉に、青羽は片眉をぴくりと動かす。

「私、体が弱いらしくて耳飾りの神力で体力を安定させているらしいんです。だから、大ばば様には絶対に耳飾りを取ってはいけません」

「言われていたんですけど」

青い顔で苦笑する咲良に、青羽はかっと濡羽色の瞳を見開き、そこに激しい炎が燃え立つ。

「これは返す」

咲良に押しつけるように、耳飾りを握った手で咲良の手を掴んだが、咲良はやりわりとそれを拒絶する。

「いいえ、これは青羽に。だってほら、耳飾りを外しただけでこんなにふらふらになるなんて、耳飾りに神力がある証拠でしょ？ 頭さんの病に効くわ。必ず、頭さんは元気になります」

まぶしいほどの微笑みを向けられて、青羽はやるせない思いに胸が切なくなる。

本当ならば、耳飾りを咲良に返さなければならぬ。だが咲良の言葉に、これで頭を救えるかもしれないという一筋の希望を見出して、耳飾りを握る拳に視線を落とす。

「それに、私なら大丈夫。耳飾りはもう一つありますから」

そう言って片方の耳に手を当てた咲良は、弱々しい笑顔を向ける。その守ってやりたくなるような儚さに、ますます抱きしめたい衝動にかられて、青羽が手のひらに爪が食い込むほど強く拳を握りしめる。

「分かった、だが約束する。頭の病を治し、必ずこの耳飾りを咲良に返すと 約束しよう」

艶やかな余韻を含んだその声にドキツとして振り仰いだ咲良は、青羽の青みを帯びた瞳にまっすぐに射とめられる。

気品が香りたつような瞳の中に、やりきれないほど切なげな一筋の光を帯びた青羽は、次の瞬間。

力強く咲良の腕を引くと、その腕の中に優しく抱きしめた。

「咲良 ……」

切ない声音に咲良はきゅっと胸がしめつけられた、どうしていいか分からなかった。

ただ、これで青羽とはお別れだということだけを感じて、溢れだしてくる涙を堪えることが出来なかった。

瞳に溜まる透明の雫に気づいた青羽は顔を傾けると、そっと瞳に口づけを落とし、それから、咲良の唇を奪った。初めは優しく、次第に激しく。

何度も唇を合わせて、咲良のことを強く抱きしめた。

魅惑的な眼差しにいいように見つめられて、咲良はうっとり青羽の青みを帯びた瞳に見とれた。

言葉を交わさずにはばらくの間抱きしめ合い、そっと青羽の腕の力が解かれた時、咲良は、ほんのわずかな笑みをもらして俯いた。

「街の近くまで送ろう」

青羽の言葉に頷き返し、咲良は洞窟の隠れ家を後にした。

第14話 約束（後書き）

この話で【青羽編】は終了となりますが、青羽はまた出てくるので
お楽しみに！

次話からは【柚希・朱璃編】となります。

二人の登場を待っていた方、お待たせしました！
頑張るので応援よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801z/>

ミスティローズ 甘い香りに魅せられて、君に死ぬほど恋焦がれて

2011年12月29日12時53分発行